

春↪秋すみ分け、積雪期は放置リンゴ、カキ

共存カラス2種 季節で餌変える

共存するカラス2種は、春から秋は異なる環境で餌を探してすみ分ける一方、積雪期には放置されたリンゴやカキなど限られた餌資源に集まることが、弘前大学と岩手大学が津軽地方で行った研究で分かった。2種が季節によって利用環境を変えながら共存している実態を明らかにした成果で、研究グループは、カラス個体数の抑制や農作物被害対策への応用につながることを期待している。(菊合賢)



積雪期に農業残渣などへ集まるハシブトカラス(左)とハシボソガラス(右) 弘前大提供

弘大など調査 農作物被害対策 応用も



ムラノ千恵助教



熊倉 優太さん

研究を行ったのは、岩手大大学院連合農学研究所博士課程(弘前大配属)の熊倉優太さん、弘前大農学生命科学部のムラノ千恵助教、東信行教授ら。研究対象は、県内でも広く見られるハシボソガラスとハシブトガラス。これまで農作物被害や生活環境被害の対策では両種をまとめて「カラス」として扱うことが多く、一年を通じた生

態の違いは十分に解明されていなかった。

研究グループは2020〜21年、津軽地域で衛星利用測位システム(GPS)発信機による行動追跡と採食状況の観察を実施し、餌資源の違いを調べた。

その結果、春から秋にかけては、ハシボソガラスが主に水田などで落ち穂や無脊椎動物を餌としていたのに対し、ハシブトガラスは畜産施設の飼料や山林の果実を餌としていたことが判明した。

一方、積雪期になると両種とも放置されたリンゴやカキ、農業残渣などの人為

的な餌資源を利用する傾向が確認された。調査期間中に家庭ごみをあさる様子は確認されず、市街地よりも農地や果樹園など郊外の資源を主な餌としている実態も明らかになった。

研究グループの熊倉さん、ムラノ助教は「冬季は餌資源が最も限られる時期であり、放置果実などの管理を徹底することで、地域のカラス個体数の抑制や農作物被害の軽減につながる可能性がある」としている。

研究成果は5月29日、国際誌「エコロジカル・リサーチ」に掲載された。

この画像は、当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。